第一問 解答例

問1　インタビューセッションで相手がこちらの共感を求めていると感じたときには、相手の意図に乗って同意したり、逆に、自分の考えで否定的な判断をしたりするのではなく、言葉の奥に隠された、その人の今ここでの感情や思いを引き出すために、ただ聞くという態度で淡々と反応するようにしているということ。

問2　感情を強く伴う語りも、淡々とした語りも、その人が語る言葉の表面的な意味と、音として聞こえる声から感じられるものが隔たっているという点では同じであり、どちらも、その人が本当に言わんとしていることを隠す語りになっているということ。

問3　技巧的な話し方によってこちらの共感や同意を取り付けようとしていることを相手に気づかせ、その人の立ち位置や視点、その立ち位置や視点を可能にしているものを明らかにするため。

問4　相手が望むとおりにこちらの共感や同意が得られたとしても、そこからは何も新しいことは起きないことを相手に気づかせ、その人自身が自覚していない切実な願いや訴えを引き出すため。

問5　社会的な関係において言葉の使い方に配慮する「繊細さ」とは、互いに相手に支配されないように競い合う上で必要とされる感性に過ぎず、人間も自然の一部であることを感じ取って自分の内側に耳を澄ませるような繊細さとは異なるということ。

問6　インタビューセッションで必要なのは、安易な共感や同意でも善悪や正誤の判断でもなく、相手をコントロールすることでも要約や解釈でもない。話し手は謙虚に今ここでの感情を話し、聞き手はその人の話をその人の話としてただ聞くという協力関係によって、話し手も自覚していない真の感情を引き出し、新たな可能性を開こうとするのが「完全に聞く」ことだということ。

第二問　解答例

問１　地球資源の大量消費や二酸化炭素の排出が環境危機を引き起こし、マネーの供給拡大がグローバル経済の不安定性や富の偏在を引き起こしているように、無限の経済成長を前提、目的としてきた資本主義の持続可能性が危うくなっているという問題。

問２　文明の発展によって、人類は既に19～20世紀以前とは異なる生き方をしており、人間の活動が地球規模で支配的になったことで地質層の形成に影響を与えるほどにまで巨大化しているのだという地質学の認識は、人文学や社会科学の領域にも適用されるべきものだから。

問３　人間が自然環境から資源や道具を取り出して使用する規模が大きくなりすぎたために、自然が地球規模で破壊され、人間の生存の条件である生態系の維持が限界を迎えていることが、急速に現実問題として意識されるようになってきたということ。

問４　理性や意思をそなえ自由を行使して世界を創り出す人間を主体と見なし、人間以外の自然を客体と見なして区別する考え方が、無限に存在する自然から資源や道具を取り出せば文明は無限に発展するという近代の価値観を可能にしてきたということ。

問５　人間が様々な動物を実験に用いて人間のための新薬を開発しているように、人間も他の生物も自然の一部であるという考え方から、人間は自然を利用する主体であり自然は利用される客体であるという二分法を前提とした考え方に変わったということ。

問６　近代法では、意思に人格の本質を見いだす哲学的前提に立って人間を抽象的な権利義務の帰属主体と見なし、所有されるモノを人間以外の具体的存在と見なすため、この二分法的な考えのもとでは、人間はつねに所有の主体にしかなりえないから。

代々木ゼミナール

第三問　解答例

問１　①＝病気で死んでしまったならば
②＝思いもよらない縁故
③＝きまりの悪い思い

問２　打消の助動詞「ず」の未然形＋推量の助動詞「む」の已然形

問３　病が重篤なために、出家した尼寺から愛宕近くの仮の住まいに移るということ

問４　かつての恋人の乗った車と遭遇し、恥ずかしくきまりの悪い思いと共に、遭遇できたことへのうれしさや、自身の病気のこともあり二度と会えないかもしれない悲しさなど、複雑な思いが込み上げてきたから。

問５　１＝（ア）
２＝話し相手もなくて心細く、落ち着いて眠ることもできないような、粗末で頼りない住居。

問６　病の身である上に、粗末な転居先に訪問してくる人もいないという孤独な境遇にあって、「この世に確かなものはない」と書かれた経文を自分に言い聞かせて、その経典を友として自分の拠り所にしたいという思い。

問７　（イ）

代々木ゼミナール

第四問　解答例

問１　（１）＝子瑜の孤に負かざること、猶ほ孤の子瑜に負かざるがごときなり。

（２）＝子瑜が私を裏切らないことは、ちょうど私が子瑜を裏切らないことと同じだ。

問２　諸葛瑾と諸葛亮は兄弟の間柄であり、道義を重んじる二人であれば、当然弟の諸葛亮が兄の諸葛瑾の意向に従うであろうと考えたから。

問３　孤当三以レ書解二玄徳一

問４　弟が呉に留まらないように自分も他国には行かないという子瑜の発言は神明に達するに十分な真実であり、子瑜が私を裏切り劉備のもとへ行くことなどあるはずもない。

問５　がいげんのかんするところにあらざるなり。

問６　ⓐ＝かへざる　ⓑ＝ひととなり　ⓒ＝もし

代々木ゼミナール